Contents

［特集］
生誕100年 司馬遼太郎
大阪逍遙
旅人＝磯田道史　文＝ペリー荻野

24 東大阪市・司馬が暮らした地
30 インタビュー　上村洋行さん／竹下景子さん
35 大阪市・司馬文学散歩
44 生誕100年 司馬遼太郎 大阪逍遙［案内図］

特別企画　富士山世界文化遺産登録10周年記念
6 令和、富士山景
Scenes of Mt. Fuji Today
56 おいしいもんには理由がある　文＝土井善晴
つるり、太平燕［熊本市］

京都の路地 まわり道　文＝千 宗室
15 タンポポの魔法
ひとときエッセイ「そして旅へ」　文＝高橋久美子
17 小倉トーストと母
あの日の音　文・絵＝北阪昌人
19 ゴッホと渦潮
わたしの20代
20 吉川壽一（SYOING ARTIST）

柳家喬太郎の旅メシ道中記
47 親玉菓舗の碌寶焼［福井市］
ホンタビ！　文＝川内有緒
48 城アラキ著『バーテンダーの流儀』［長野県松本市］
地元にエール　これ、いいね！
52 姫路の白革小物［兵庫県姫路市］
旅するリラックマ
54 尾白川渓谷［山梨県北杜市］
ホリホリの旅の絵日記　文・絵＝堀 道広
77 Awabi ware［兵庫県淡路市］

60 旬 News & Topics
62 美 Art & Entertainment
64 遊 Event & Festival

旅の小箱　from JR西日本、JR東海
66 「WEST EXPRESS 銀河」紀南コースが3年目の運行！
67 石川県で楽しむ芸術の秋
68 兵庫デスティネーションキャンペーン ジャズ演奏100周年の神戸へ
69 「Apple PayのICOCA」サービス開始！
70 東京～大阪・ご当地グルメが勢揃い「オールスターズ」を召し上がれ！
72 京都で見つけた逸品をどうぞ「いいもの探訪」でお取り寄せ
73 「いざいざ奈良」キャンペーン1周年記念企画 奈良旅の写真コンテスト結果発表！

74 ひとときの倶楽部
読者からのお便り 今月のプレゼント など
76 次号のお知らせ
78 ルートマップ 東海道・山陽新幹線時刻表

司馬遼太郎記念館の庭の小径を歩いていると、当時の姿をとどめた司馬の書斎が現れる　写真＝荒井孝治（表紙も）

司馬の歴史小説や随筆に幾度となく登場する大阪城。歴史学者・磯田道史さんが立つ極楽橋は人気の撮影スポット

は読者プレゼントがあるページです

※本誌に掲載している施設やイベント等の情報は2023年7月現在のものです。
お出かけの際は現地にお確かめください。また、価格のうち特に表記のないものは税込です

富士山世界文化遺産登録10周年記念

令和、富士山景

Scenes of Mt. Fuji Today

写真=橋向 真
Photo by Makoto Hashimuki

今も昔も変わることなく、
日本人の心の拠りどころである富士山。
その世界文化遺産登録10周年を記念して、
壮大な富士山の姿を発信し続けている
人気写真家・橋向(はしひき) 真(まこと)さんが捉えた
美しき霊峰の姿をお届けします。
また、私たちが富士山に特別な思いを抱く理由を、
民俗学者の神崎宣武(のりたけ)さんにうかがいました――。

Forever unchanging, Mt. Fuji represents the soul of the Japanese people. In commemoration of the 10th anniversary of Mt. Fuji's registration as a World Heritage Site, we continue to celebrate its majestic form as a sacred peak captured by noted photographer Makoto Hashimuki. At the same time, we interviewed folklorist Noritake Kanzaki as to why Mt. Fuji provokes such special feelings.

冬の精進(しょうじ)湖畔 ／＼ The banks of Lake Shoji in winter

富士五湖のひとつである精進湖で冬の早朝に撮影。2013年の世界文化遺産登録を機に富士山を撮り始めたという橋向さんは「富士山が織り成す自然の神秘に魅了されて10年。富士山の神気に突き動かされてきたような気がします」と話す。

This photo was taken early one winter morning at Lake Shoji, one of the five lakes surrounding Mt. Fuji. Hashimuki, who started photographing Mt. Fuji after it was registered as a World Heritage Site in 2013, says, "It's been ten years since I was first mesmerized by the mysterious environment around Mt. Fuji, whose divine spirit never fails to move me."

橋向 真

富士山写真家。1977年、静岡県生まれ。地元の静岡を拠点に活動し、SNSで世界に向けて富士山の魅力を発信。写真集『神気新・富士山景』が好評発売中

Makoto Hashimuki

Photographer of Mt. Fuji. Born in Shizuoka Prefecture in 1977. From his hometown of Shizuoka City, he connects to the world via social media to promote the appeal of Mt. Fuji. His photo book "Shinki Shin – Views of Mt.Fuji" (Impress) is now on sale.

特集

生誕100年 司馬遼太郎「大阪逍遙」

国民的作家・司馬遼太郎［1923-1996］は、
大阪で生まれ育ち、生涯にわたり大阪で暮らしました。
旧邸の書斎が残る司馬遼太郎記念館を訪ねて、
あらためて、彼の人となりや信念に思いを馳せれば、
司馬作品を読み継ぐべき理由が浮かび上がります。
また、彼は小説や随筆の中で
大阪の町や人をいきいきと描写しました。
大阪市内に残る司馬作品ゆかりのスポットを
歴史学者・磯田道史さんと散策しながら
司馬文学と大阪の魅力を探ります。

旅人＝磯田道史
Isoda Michifumi
文＝ペリー荻野
Perry Ogino
写真＝荒井孝治
Arai Koji

司馬遼太郎記念館では、司馬の書斎を窓越しに眺められる。愛用品や数え切れないほどの資料から、執筆の様子が目に浮かぶ

東大阪市 司馬が暮らした地

まずは、司馬が終の棲家を得た東大阪市にたたずむ、司馬遼太郎記念館へ。超人的な執筆活動に勤しんだ当時の書斎や彼の蔵書庫をイメージした書架に触れて、司馬の世界に近づきます。

今年、生誕100年を迎える作家・司馬遼太郎は大阪市に生まれ、生涯、大阪を拠点に執筆活動を続けた。

大阪外国語学校蒙古語学部（のちの大阪外国語大学、現・大阪大学外国語学部）を学徒出陣により仮卒業。復員後、新聞記者となり、産経新聞大阪支社に勤務していた1956（昭和31）年、「ペルシャの幻術師」で文壇デビュー。1960年「梟の城」で直木賞を受賞する。

作家として歩み始めた頃、司馬が暮らしていたのは、大阪市西区の「西長堀アパート」だ。1958年竣工の通称・マンモスアパートは、当時、「憧れのモダン団地」と呼ばれ、女優の森光子や南海ホークス時代の野村克也が住んでいたことでも知られる。司馬はここで代表作「竜馬がゆく」を書き始める。

司馬の義弟で「司馬遼太郎記念館」の館長を務める上村洋行さんによると、この団地に住んだのは偶然だったという。だが、辺りは土佐藩の蔵屋敷があった土地で、10階の司馬の部屋からは、団地の隣の「土佐稲荷神社」が見下ろせた。竜馬とも縁が深い三菱創業者の岩崎弥太郎がこの地で会社を起こし、稲荷神社を繁栄の守護神としたと知ると、小説の神が、若き作家をここに呼び寄せたのではと思えてくる。

その後、アパートに蔵書がおさまりきらなくなり、1964年、東大阪市の一軒家に引っ越す。しかし、ここでも蔵書があふれ、また市内で引っ越し。晩年まで暮らした2軒目の家が、「司馬遼太郎記念館」となった。

地元での暮らしぶり

司馬は、朝9時ごろ起床し、朝食をとって、新聞全紙に目を通すと、書斎で執筆。午後3時ごろには、みどり夫人とともに近所の駅まで歩き、喫茶店や蕎麦屋に立ち寄る。この習慣は、編集者の間で「司馬さんの散歩」として知られていた。80年代後半から約5年間の随想を集めた『風塵抄』（中公文庫）には、

私は毎日駅前あたりまで散歩する。

急行のとまらない駅ながら、公立二つ、私立二つの高校生が利用していて、午後の散歩のときなど、しばしば下校時の群れに出くわす。

「刑事コロンボ」のコロンボ風にガニマタでよたよた歩く若者が多く、「ガチョウの群れにまぎれこんだような錯覚をもってしまう」。しかし、日々歩くうちに、

[上]在りし日の司馬遼太郎　写真提供＝司馬遼太郎記念財団　[下]文章の推敲に愛用した色鉛筆

大阪市 司馬文学散歩

司馬の小説や随筆には、たびたび大阪が登場します。歴史学者・磯田道史さんが、ゆかりのスポットをめぐりながら、大阪文化や司馬について、縦横無尽に語ります。

土方歳三の生涯を描いた司馬の小説『燃えよ剣』に登場する、口縄坂〈くちなわざか〉を歩く

偉人たちの残り香をたどる

小学生時代から司馬作品の愛読者という歴史学者・磯田道史さんと歩く大阪の旅。その始まりは、緑豊かな寺町めぐりから。

天王寺七坂

大阪城の南、難波宮から天王寺までの上町筋周辺には、約200もの寺社が立ち並ぶ。かつて大坂[*1]を支配した豊臣秀吉は、ここに寺を集め、頑丈な門と分厚い土塀が壁となって連なるようにして、城塞の役割も担わせたのだという。寺と寺の間を通る真言坂、源聖寺坂、口縄坂、愛染坂、清水坂、天神坂、逢坂の通称「天王寺七坂」は、今は散策コースとして人気だ。

司馬は江戸と大坂の盗人が腕を競うという風変わりな短編「泥棒名人」の中で、この辺りのことを記している。

江戸は市中に谷と崖と坂がふんだんにあるが、葦のしげる淀川の三角洲に発達した大坂の町は、そうした凹凸にめぐまれていない

江戸の泥棒・音次郎が向かったのは、源聖寺坂だ。

593（推古天皇元）年、聖徳太子によって建立された四天王寺に伝わる「天王寺舞楽」。司馬は大阪市民によって継承されている舞楽を評価した（＊2）　写真提供＝四天王寺

源聖寺坂をのぼれば、死者の町である。築地塀のくずれから卵塔がのぞき、死霊を擁した本堂のいらかが、月もないのに暗闇の空へぶきみな薄光を放っている

恐ろし気な書き方だが、実際に歩いてみると、日差しもよく届く緩やかな階段状の坂道だ。坂の上の齢延寺には、江戸後期、漢学塾「泊園書院」を開いた儒学者、藤澤東畡・南岳父子の墓所がある。砲術家の高島秋帆や明治期に外務大臣となる陸奥宗光らが学んだ泊園書院は、関西大学の礎のひとつとなった。司馬も小説『世に棲む日日』の中で、吉田松陰が影響を受けた変わり者の学者・森田節斎が、東畡と対面した場面を描いている。また、口縄坂付近の浄春寺には、やはり江戸後期の天文学者・麻田剛立、画家・田能村竹田、春陽軒には国学者の尾崎雅嘉、太平寺には医家・北山寿安の墓所もある。

磯田さんによると、大坂は、新しい思想を持った人たちにとっては、願ってもない「解放区」だった。

「麻田はヨーロッパの最先端の軌道計算を学んで、豊後を離れた人ですし、竹田も豊後の岡藩で藩政改革を訴えたものの退けられてここに来た。中国の科挙やヨーロッパの会議など、身分に基づかない制度を知る知識人、オタクがこの界隈に集まって、想像を絶する会話が飛び交っていたと思いますよ。江戸徳川の武士の世界は、政治力と武力、力が強い相手だ

いそだ みちふみ／歴史学者。1970年、岡山県生まれ。近世中後期の藩政改革を専門とし、近年では天災（地震、津波）や感染症などの歴史研究も行う。慶應義塾大学大学院博士課程修了。静岡文化芸術大学教授などを経て、2016年、国際日本文化研究センター准教授、21年4月から教授。『「司馬遼太郎」で学ぶ日本史』（NHK出版新書）など著書多数。最新刊は『徳川家康 弱者の戦略』（文春新書）

＊1 戦国時代から江戸時代にかけての記述では、当時の表記「大坂」を用いています（41頁まで）
＊2 随筆「大阪の原形」（『司馬遼太郎が考えたこと 13』新潮文庫に収録）より

おいしいもんには理由（わけ）がある

第57回

文＝土井善晴
Doi Yoshiharu
写真＝岡本 寿
Okamoto Hisashi

紅蘭亭の太平燕は鶏ガラと豚骨でとったスープを福建省産の天然塩で調えた優しい味わい。エビなどの海鮮と旬の野菜がたっぷり

熊本で愛されている太平燕（タイピーエン）は、あっさりスープの春雨麺。大陸との交流を感じさせる、その味わいとは？

つるり、太平燕

《熊本市》

阿蘇エリア以外で熊本県を旅するのは初めてという土井さん。早朝、「せっかくだから朝食前にみんなでお城を見に行ってみませんか」と、スタッフを誘って熊本城へ。「端正で隙がなくて、これは攻めにくかったやろなあ」と感嘆。写真は加藤神社からの一枚。熊本城の周囲は美術館や飲食店が集まる文化的でにぎやかな雰囲気だ

どい よしはる／1957年、大阪府生まれ。料理研究家、十文字学園女子大学特別招聘教授。NHK「きょうの料理」に出演。『一汁一菜でよいという提案』（新潮社）など著書多数

熊本の町は初めてです。興味津々、そうなると、否も応もなく町並みと人が織り成す景色が目に飛び込んできて、これまで訪ねてきた旅の経験と重ね、オートマチックに町の雰囲気を読み取ろうとする。そして、何かしらの面白さを発見すると、町に対する印象は、好感に変わるのです。

熊本の印象は、よく維持された昔ながらの家並みに混じってすっきりとモダンな建築も建ち並ぶ。古いものにセンスよく手を入れたお店がポツンポツンとある。おしゃれなヤングが目立つ。出勤する人の姿に、若者が仕事する姿に、町のやる気を感じるなあ。世代を超えて、健全な新陳代謝ができているように思います。

路面電車が走る道路に出た途端、正面に熊本城が現れました。やたら大きく見えました。まっすぐ長く延びる、角がキリッとしたお堀に面した石垣。重厚な石でさえ、すっきり軽やかです。これぞ築城の名手と知られる加藤清正の真骨頂。お堀の内側にある大木を見上げて歩いていたら、清正公をお祀りする加藤神社がありました。この町に住み、毎日、お城を見ている熊本の人は、お城にも見守られているのだろうな。お城は熊本の物理的な中心のみならず、きっと精神的な支柱にもなっているように思います。自然災害にめげず、城内や周囲がきれいに手入れされている様子を見ても、市民の熊本愛が感じられて、ずっと大切にされてきたことがわかります。

熊本名物、太平燕とは？

さて、中国・福建省沿岸あたりに船を浮かべれば、九州の西岸はほど近い。古くから、中国の人たちとの交流があり、さまざまな大陸文化や最先端の技術が渡ってきたところ。稲作や鉄の道具もそうですが、五島列島に伝わった「手延べそうめん」、宮崎の山間部に残る茶葉を鉄釜で直に炒り上げる「釜炒り茶」もそうでしょう。また、彼らは欧米との付き合いの浅かった日本人の水先案内人となり、西洋と結ぶ架け橋にもなっていたのです。

今回の目当ては、「太平燕」、熊本にしかないという中国料理です。ところで、そろそろ時分時（じぶんどき）、太平燕を経験するべく、中心部のアーケードにある「紅蘭亭（こうらんてい）下通本（しもとおりほん）